

No.109 ヴィト・アコンチ —無題—

Vito Acconci

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年2月1日付 立川市市報記事より

輪切りになった小さな自動車が止まっている。それはよく見ると歩道にあって、人が座れるようにもなっている。このビト・アコンチの車止めの機能を持ったベンチは大人気だ。注意深く観察すると、この車は歩道の色と同じになっている。彼は、歩道がそのまま車になってしまったベンチを作ったのだ。長さ3メートル、幅60センチメートル、高さ1.5メートルという制約の中で、楽しく、批判精神を持った、街に必要な休息所を作るなんて見事なものだ。アコンチは、奇想天外な素晴らしい仕事をする事で注目を集めている美術のトップランナーだ。どこへ行ってしまふのか分からない文明に警鐘を鳴らしながら、美術の楽しさを伝えてくれる。数年後、この車は美術の教科書に載ることになっている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

提案:

ベンチは街によって形作られます。

ベンチの形は車道を走る車から来ており、ベンチの素材は歩道と同じものです。

ベンチは縦に半分に割れた車体です。内部が外にさらけ出されており、前座席の半分と後部座席の半分が見え、切断されたエンジンの内部が露わになっています。半分になった車は正常な車のタイヤの半分ずつ、前と後ろにのっかっています。

半分の車は内部についても外部についても細部はすべてそろっていますが、通常の素材が持っている素材はなにも持ち合わせていません。それはあたかも石と化した車です。車はそれが設置される歩道の御影石に化してしまっただけです。その表面は内も外も歩道と同じ御影石です。車の表面は窓やヘッドライト、ナンバープレートなど揃っていて、御影石の歩道と同じ外観と生地を持っています。御影石の歩道との継ぎ目の線は、車の上、そして中へと続き、シート、エンジン、外壁、内壁を分けています。その車はあたかも、御影石の歩道から生まれたかのように、御影石の歩道が車という物体を産み落としたかのように見えます。

半分の車は腰掛として機能し、車道を背に、歩道に面しています。普通の車に乗っているときのように、半分になった前座席もしくは半分になった後部座席に座ります。そこに座った人は車道から閉ざされ、歩道に行く歩行者たちと並行した位置にあるカプセルの中に入ります。もしくは片鞍乗りに座り、足を車から出して歩道の上で、ぶらぶらさせながら、車の開かれた表面から歩道を眺めることもできます。

半分の車は、車道に対する壁として機能します。

壁はベンチになり、人々でいっぱいになります。

車は歩道を飛び越え、歩道に吸収され、歩道の一部となります。歩道は車を発展させるのです。

そして歩行者は、交通に反対する車を獲得するのです。